

子どもの自己主張・自己決定を大切にする保育

—M保育所の実践をととして—

○ 大森 悦子 岩井 美恵
(仙台市向山保育所) (仙台市向山保育所)

はじめに

保育の中で大事にしたいことは、子ども自身が自分の思いや考えを表現し、主張できること、そして、自分が今どうしたいのかを自分自身で決められるようにすることである。子ども達は、自分の気持ちを言葉で言えた時には、いきいきとした表情になり、自分達で決めることができたときは意欲的となる。子ども達は、自分達の気持ちでのびのびと遊んでいる時は、とても楽しそうである。また、保育者にとっても、子どもの気持ちや思いを感じとり、共感できたときは、保育することの楽しさを感じる。

子ども達が自由に自分の思いを主張し、何をしたいのかを決めていくためには、日常の保育において、保育者の関わりと、子ども達自身の仲間関係が大事であると私たちは、実感してきた。本研究では、自分の気持ちを言葉で表現できず、自己決定できなかったA児の事例を取り上げ、保育者の保育の在り方や子ども達の仲間関係が、子どもの自己主張・自己決定する力を育てる過程に及ぼす影響について研究したいと考えた。今回は特に、次の2つの面から自己主張・自己決定を明らかにすることを目的とする。

1. 保育士のA児への配慮及び保育の工夫
2. 子どもの仲間関係

方法

期 間；2000年4月初めから2002年3月末

場 所；仙台市公立M保育所

対象児；A児（女）観察年齢4歳8ヶ月～6歳8ヶ月
保育経験6年（生後8ヶ月から入所）

A児は他児に比べて、特に自己主張ができない点が目立っていた。

手続き；A児に対して、担当保育士I（以下I保育士）は、特に受容的に接すると共に、A児が自分自身に自信をもって表現できるよう配慮した。I保育士が観察し保育した実践記録を共同研究者と分析する。

結果

1. 保育士のA児への配慮及び保育の工夫

A児は、4歳児クラスの時は、殆ど、自己表現・自己主張するという場面が見られず、I保育士が先導的

に働きかけることが多かった。（E17-F1）5歳児になってからは、クラス全体の成長とともに、A児も次第に自己表現し、自己主張・自己決定できるようになった。（E17-F3）

- 1）本人の気持ちを言葉で表現できるよう援助する。

A児が自分から要求したり否定したりすることができずにいるときには、I保育士は、A児の気持ちを探って言葉で表現するようにし、どうしたいのかを決められるように一緒に考えた。A児が少しずつ自分の気持ちに気づき嬉しそうな表情で言えるようになると、保育士も話してくれることがうれしく、もっと良く聞いてあげたいという気持ちになると共に、A児に対してその感情を表明していくようになった。やがて、A児は、自分に関心をもって話を聞いてくれる存在としてI保育士を受けとめることができるようになり、互いの信頼関係が形成されていった。

- 2）A児の喜ぶ遊びを多く取り入れる

A児はとても運動が得意であったので、このことをとおして自信を深めて欲しいと考え、鉄棒、縄跳び、体育遊び等の機会を多く取り入れた。A児が見せてくれる演技はとても上手であったので、他児に対するA児への良いイメージ創りとなった。また、その他の集団の遊びにおいても、身体を動かす楽しい活動を多く取り入れることで、保育所での生活がより楽しいと感じてもらおうよう心掛けた。（E17-F2）

- 3）話し合いの習慣を形成する

クラスの中では、「何を言ってもいい」という自由で話しやすい雰囲気をつくるようにした。また、常に話し合うことを大切にし、自分でどうしたいのかを言えたり、決めたりできる習慣をつくった。保育者はできる限り見守るようにし、子ども達自身が集団の中で答えを出すことを尊重するようにした。

- 4）選択することを尊重する

生活や遊びの様々な場面において、選択肢を用意することで、グループまたは、個人が選択し、決定しやすいようにした。A児にとって当初、選択することに困難な様子が見られたので、個別配慮も必要としたが、繰り返し選択を経験することで、卒園時には、自分の思いを主張すると共に、自分がどうしたいかを決め

ることができるようになった。

5) 特徴的なエピソード

ビデオ1; 椅子に座る 4歳児クラス 5月23日

A児が座っていたところへ、F児が「どけて」と来た。A児は少し間をおいて譲った。隣りに座っていたB児は「後から来たんだから」とF児に怒るが、F児は「Aちゃんが譲ったんだから」と答えた。そこでI保育士は「Aちゃんはどう思うの?」と聞くが、何も言わないので、更に「座っていた所を変ったけど、他の所でもよかったの?」と聞く。首を傾げたので「今のは分からないってこと?」と聞くと「うん」とうなずく。「そうか、分からない気持ちだったんだ。じゃあ、一緒に考えてみよう」「初めに座っていた所がいいの?ほかでもいい?」とゆっくり聞くと、「他でもいい」のところとうなずいたので、「すごいねAちゃん、他でもいいって気持ちと言えたんだ」

ビデオ2; 跳び箱遊び 4歳児クラス 10月19日

I保育士が、A児の得意な跳び箱をみんなに見せて欲しいと頼む。いいと言うのでやってもらう。A児が跳ぶと子ども達の中から「すごい」、「足が大きく開いている」等の声があがり、同時に拍手が起こる。にっこりとしたA児は嬉しそうに「もう一回やってみる」と言った。自己主張する言葉がA児自身から出たのはこの時が初めてであった。

2. 子ども達の仲間関係における変化

1) 話し合いと相互理解

4歳児クラス当初、ゲーム遊びで、A児が順番を決められず、遊びが中断してしまった。子ども達の中からは、遊びが進まないことへの苛立ちと、自分で決められないことへの疑問の気持ちが強くなり、A児への批判となった。批判されたA児は泣いてしまいその場は混乱した。しかし、子ども達はその後、自分達で話し合いのきっかけを掴んだ。Aが自分で決め、発言してもらうために、どうしたらよいかについて、話し合いが始まった。子ども達は、自分自身の言えなかった時の経験から、急がされたり、みんなで一斉に聞かれると言えない、ということに気がついた。そして、A児が発言するまで「待つ」ことを決めた。発言してもらうためには、待たなければならないという気持ちが子ども達に芽生えた。相互理解をしていくうえで、自己主張が大事であるという理解が育ったことを指し示している。一方、A児には、待つ努力に応えようとする気持ちが芽生え、発言が引き出されていった。子ども達の率直な感情に基づいた言葉による表現と主体的行動は、A児の気持ちを変化させる原動力となった。

2) 子ども達の仲間関係と保育士の関わり

日頃から子ども達の気持ちや思いを聞き、話し合うことを大事にしてきたI保育士の行動は、子ども達にとってモデルとなり、待つ姿勢や選択肢のある聞き方ができるようになる等、子ども達に影響を与えていった。子ども達の工夫する選択肢は簡単で分かりやすく、A児も次第に答えることに自信が持てるようになった。周りの子ども達も答えてくれることが嬉しいと思えるようになり、A児が発言できる度に、一緒に喜んだり励ましたりするようになった。A児の成長とともに、他児の他者への関係のあり方も成長し仲間関係が育っていった。

3) 特徴的なエピソード

ビデオ3; リレー 5歳児クラス 5月29日

子ども達でリレーの順番を決めていた。友だちに順番を決めてもらいそうになっているA児に気がついたC児が「1番から11番の中で何番でもいいから好きな番号言って、待ってるから」と言った。A児は8番と言う。しかし、既にE児が決めていた番号だったので、じゃんけんとなりE児は負ける。それからのリレーでは、子ども達は「Aちゃんは、何番がいいの」「Aちゃんいった?」と聞くようになっていった。

考察

集団生活の中で、ともすれば、日々の流れの中に、子ども達一人ひとりの思いを大事にすることや、個への尊重を忘れがちになる。自己主張は、その前提に、自分で自分を表現できるということがある。しかし、おとなしい子ども、内気な子どもなどは、なかなか自分の思いを表現できずにいる。

本研究では、集団生活の中で、保育士のより一層の援助がいる子ども達への配慮の大切さと、それを仲間集団が受けとめて、子ども達全体が育つということが明らかになったと思う。「自己主張」の根本は、表現できる自分の思いや考えが、保育の中で育てられるかである。あえて、「自己決定」もテーマに出したのは、仲間関係が集団の中で育った時、様々な「自己主張」から「自己決定」に進む大切さである。これは、保育者が環境の設定として、物理的にも、心理的にも、多くの選択できる場面を作ることである。

今後の課題としては、「自己主張」「自己決定」に関するより深い洞察を、子どもの姿から収集し、両者の関係と重要性をより慎重に深めることである。そして、保育者集団が、子どもの一人ひとりの人権をより強く認識し、子どもから学ぶ姿を、常に新鮮に持ち続ける努力も自戒となろう。